

『金光明經』における空性について

ウルジージャルガル

1. はじめに 空性は初期仏典では無常説や無我説、禪定などに関連づけて説かれ、大乘仏典では般若波羅蜜や縁起説などに関連づけて説かれる。本論の目的は『金光明經』(Suv)「空性品」を取り上げ¹⁾、同章に説かれる空性説の構造に着目し、Suv がどのように空性思想を取り入れているかを解明することにある²⁾。

「空性品」は 33 の偈頌から構成されている。同品を構造分析するに当たり慧沼は『十八空論』を用い³⁾、十八空の中から八種を選んで「空性品」を解説している。また彼は『弁中辺論』も引用し⁴⁾、一切法空を説明している。壬生[1987: 173–176]も同様に分類している。しかし『大空經』を起源とする内空・外空・内外空を除けば⁵⁾、必ずしも Suv に説かれる空性説は慧沼疏などが説明に用いる八種の空とは一致しない。以上の点を踏まえ「空性品」の構造を順次に見て行く。

2. 「空性品」序論—第 1–3 偈— Suv「空性品」第 1–3 偈に当たる序論は本章が空性について説く趣旨を挙げる。この趣旨を示す文には世尊に相對して教えを告げられる対告衆が現れないという特徴があることを壬生[1987: 178]は指摘する。Suv の構成上の流れを考えると「空性品」の前章「讚歎品」は世尊が地神堅牢善女天という女神に教えを説くことから始まる。「空性品」はそれに続いて説かれるので対告衆が登場しない形式が採られていると推測できる。また「空性品」第 16 偈には「女神よ、汝はこれら諸法を見よ」という箇所があり、この「女神」は前章の地神堅牢善女天のことを指していると考えられるから、対告衆が現れないことにも合点が行く。

3. 「空性品」本論—第 4–21 偈—

第 4–10 偈 Suv「空性品」はまず六根を示し次にその六根の対象となる六境を提示する。初期仏典の『大空經』を始めとする經典における空の分類体系ではこの六根を内空、六境を外空、六根と六境からなる十二処を対象とする空を内外空に分類する。また六根と六境を縁として生じる六識について論じている。第 4 偈では身体は人気のない村、六根は六盜賊に譬えられる。初期仏典には「空性の住ま

(160) 『金光明經』における空性について (ウルジージャルガル)

い」,「空宅」または「空舎」等の空に関する記述が見られる⁶⁾。Suv「空性品」は初期仏典に説かれる修行の場としての「空屋」を修行者そのものとし、そこに巣くう六盗賊を六根に譬える。漢訳『雜阿含經』「毒蛇經」⁷⁾では人気のない村を六根、六盗賊を六境に譬えており、Suv「空性品」と内容こそ違うが形式上の共通性を持っていることがわかる。また身体を人気のない村に譬えている箇所は『維摩經』の中にもある⁸⁾。従ってSuvは『雜阿含經』や『維摩經』などに見られる表現を引き継いでいると考えられる。第5-6偈は六境を提示する。この箇所は内容上『雜阿含經』「六種衆生經」から引用されていると推測できる⁹⁾。第7-9偈は六識について述べるが、識(vijñāna)という語ではなく認識作用を行う主体として心(citta)という語を用い、その心を幻に譬え、六根と六境との相互関係を示している。また心は六境に依拠し六根の活動範囲を見出している。なお第7偈のcittaに当たるのが義浄訳では「識」(Tib. 1: rnam shes)となっており、vijñānaの訳と思われる。一方曇無讖訳は「心」、Tib. 2とTib. 3ではsemsであり、cittaの訳であろう。「インドでは伝統的に心の働きを表す言葉として心(citta)、意(manas)、識(vijñāna)が区別なく使われてきた」¹⁰⁾と指摘されている通りcittaを識と訳したと考えると第7-9偈に出てくるcittaを識で理解したほうが文脈上も理にかなう。第10偈は十二処、十八界にまとめられる一切法からなる身体(=我)について次のように説明する。「身体は人気のない村と同じく無本質で、かつ、縁によって生じたものであり、虚妄分別より生じたものであり、動かなくなった機械に等しく」、無我到に他ならないと。

第11-17偈 地、水、火、風の四元素(四大)について説く。そこでは四元素を四匹の毒蛇に譬えそれぞれの性質を説明している。四元素を毒蛇に比喩している記述は『雜阿含經』「毒蛇經」に見られる¹¹⁾。慧沼疏は第16偈の前半詩節を「畢竟空」、後半詩節から第20偈までを「無際空」にあて、壬生[1987]は第16偈全体を「畢竟空」、第17偈を「無際空」にあてている。Suv「空性品」第17偈で「生じていない元素は生じていて非存在である。実に生じているものは非存在である」と非存在を非存在であると強調しているところは『金剛般若經』に説かれる理論と共通性を持っている¹²⁾。第11-17偈では「身体は業に従い、五道の中に生まれ変わる。その輪廻転生の中で肉体は消滅する。身体(=一切法)は空であり縁によって生ずる。身体の物質的要素である地・水・火・風は非存在である」ということが強調される。人間の身体は輪廻転生し生滅を繰り返す。また身体は縁によって生ずるものであり物質的には非存在であるという無常説を説いている。

第18-20偈 苦の原因による十二縁起説である。ここでもまた第17偈と同様の論理で非存在を強調している。

第21偈 人間の構成要素である五蘊は空と等しいと述べている。この第21偈で説かれる内容は慧沼疏と壬生[1987]の分類では無散空に相当する。この箇所は *Suttanipāta* 第五章に説かれる表現と類似している¹³⁾。第4偈から説いてきた六根・六境・六識・四大・十二縁起の認識論上の身体を五蘊に結びつけ、その五蘊を空に等しいものと見よと述べている。「五つの構成要素（五蘊）があり、それらはもともと空である」という意味に解釈できよう。

4. 「空性品」結論—第22-33偈— 第22-25偈は不死 (amṛta) について述べている。「不死」はヴェーダ期以来、諸文献の中に現れる語である。初期仏教でもこの語が多く用いられ、度々涅槃と結びつけられている¹⁴⁾。Suv も「不死」という語を使って涅槃を表している。第22-25偈では「不死」が「勝れた菩提という性質」（第21偈 cd 句）であり修行者が目指す最終的な目標としての「涅槃」であることが述べられる。こうして Suv は「空性品」本論で説いてきた諸説の帰着点を涅槃と結びつけている。第22偈の内容を慧沼疏、壬生[1987]は十八空の中の性空にあて、また壬生[1987]は第23-25偈、慧沼疏は第23-33偈を一切法空にあてている。また「空性品」第26-33偈は涅槃に到達するための智慧 (prajñā) について説いている。第26-27偈では世尊が「数劫の間、考えられない程多くの仏に供養しさとりの知を求め堅く誓いを立てて修行し正しい法の身体 (= 涅槃) を探し求めた」、「両手と両足などの自分にとって大切なものまで放棄しても涅槃への到達手段である智慧を求めた」ことを述べ、第28-33偈はその涅槃に到達できる智慧とはいかなるものなのかを説明している。なお Skt. は jñāna に「智慧」と「智」両方の意味を含ませて説き、Tib. は shes rab (智慧) と ye shes (智) に訳し分けている。しかしここで説かれる智慧は修行者をさとりに導く智慧を意味する。

5. まとめ 本論は Suv 「空性品」を取り上げ、そこに説かれる空性について先行研究とは別の視点から分析を試みた。その構造を図示すると次の通りである。

第 1-3 偈	「空性品」序論	趣旨文			
第 4-10 偈	「空性品」本論	六根／六境／六識	無我	空に関する 法＝一切法	空
第 11-17 偈		四元素	無常		
第 18-20 偈		十二縁起	苦		
第 21 偈		五蘊	空		
第 22-25 偈	「空性品」結論	涅槃			
第 26-33 偈		智慧			

(162) 『金光明經』における空性について（ウルジーガル）

Suv の空性説は「空に関する法」を無我・無常・苦、或いは無我・無常・苦・空によって表していると理解できよう¹⁵⁾。*Suv*「空性品」は初期仏典からの引用も多く取り入れ、一切法を説いている。ここで説かれる空は四諦の中の苦諦に基づく空性説であり¹⁶⁾、最終的には修行者が目指す涅槃に空が結びつけられる。また、その涅槃に到達できる智慧というのは「すべての衆生より優れた智を持つ人々すら、勝者のすべての智慧を数えることはできない。そして偉大な聖者であり勝者に一瞬の間に起こった智慧は数千劫において如何なるところでも数えることはできない」¹⁷⁾と述べ、涅槃に到達できる智慧を賞讃するのである。

-
- 1) 本論では「依空満願品」における空性説についての考察は省く。 2) 本論では Nobel 刊本で欠損している箇所についてはチベット語訳から補う。 3) 大正蔵 No. 1616, 31: 861a13-867a28. 4) 大正蔵 No. 1600, 31: 464b2-477b22. 5) 大正蔵 No. 26, 1: 738a3-740c2. 6) 藤田[1982: 433]. 7) 大正蔵 No. 99, 2: 313b22-c18. 8) 大正蔵 No. 475, 14. 9) 大正蔵 No. 99, 2: 313a14-b13. 10) 佐久間[2012: 42]. 11) 大正蔵 No. 99, 2: 313b14-314a1. 12) 渡辺[2009b: 60-64]. 13) 藤田[1982: 417]. 14) 雲井[1955]. 15) 『阿含經』などに説かれる無常・苦・空・非我とは順序が違う。 16) 中村[1981:51]. 17) 渡辺[2009a: 122-135]参照。

〈略号・参考文献〉 慧沼疏：慧沼撰『金光明最勝王經疏』，大正蔵，No. 1788. 曇無讖訳：大正蔵，No. 663. 義浄訳：大正蔵，No. 665. Skt. Johannes Nobel, ed., *Suvarṇaprabhā-sottamasūtra*, Leipzig: Otto Harrassowitz, 1937. Tib. Tib. 1: P. No. 174. Tib. 2: P. No. 175. Tib. 3: P. No. 176. 雲井昭善[1955]:「原始仏教用語としての amata (amṛta) の概念について」『印度学仏教学研究』第3巻第2号，pp. 75-79. 佐久間秀範[2012]:「瑜伽行唯識思想とは何か」(高崎直道監修『唯識と瑜伽行』春秋社)，pp. 19-72. 中村元[1981]:「空の意義」『仏教思想6 空(上)』平楽寺書店，p. 51. 藤田宏達[1982]:「原始仏教における空」『仏教思想7 空(下)』平楽寺書店，pp. 415-479. 壬生台舜[1987]:『金光明經』大蔵出版. 渡辺章悟[2009a]:『金剛般若經の研究』山喜房佛書林. —[2009b]:『金剛般若經の梵語資料集成』山喜房佛書林.

(本論文は財団法人仏教学術振興会研究助成交付金による研究成果の一部である)

〈キーワード〉 空性 (śūnyatā), 空法 (śūnyadharma), stong pa'i chos

(東洋大学大学院)